

研究主題「他者と協働し、社会的事象の相互の関連や意味を考える社会科学習

—『協働的な学び』を促す指導の工夫—

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
江戸川区立第二葛西小学校 主任教諭 井出 紘貴

第1 研究のねらい

小学校学習指導要領（平成29年3月告示）において、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考え（中略）適切に表現する力を養う」こと、中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」（令和3年）では「『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実し、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげる」ことが示されている。「児童・生徒の学力向上を図るための調査（平成31年度）」では、複数の資料を関連付けて考える問題の正答率は57.6%となっており、児童の「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力」に課題が見られた。個人では資料の関連付けが難しく、考えが深まりづらかった児童も、他者と協働し、様々な資料の見方や考え方を学習することで、複数の資料を関連付けて考え、自分の考えをより深められるようになるのではないかと考えた。

本研究では、社会科の学習過程の中でも特に複数の資料を活用し、自分の考えを深める機会が多い学習過程である「課題解決」の指導を工夫し、既習の知識や複数の資料を活用して他者と協働することを通して、社会的事象の相互の関連や意味を考えられる児童の育成を目指す。

第2 研究仮説

「課題解決」の学習過程において、他者と考えを共有したり、複数の資料を基に話し合ったりする「協働的な学び」を充実させることで、児童は社会的事象の相互の関連や意味をより考えられるようになるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

「平成31年度 小学校 児童質問紙調査」において、「社会科の授業が分かる要因」として最も多い回答は「お互いに意見を出し合ったり、学び合ったりして、自分が考えたことを発表する学習」であった。これは、「異なる考えが組み合わせたり、よりよい学びを生み出す」という協働的な学びの姿であることから、「協働的な学び」は、学習内容を理解し、自分の考えを深めるために有効であると考えた。先行研究（平成23年度小学校教育研究員報告書 社会）においても、知識や概念を関連付けたり総合したりしながら考える学習におけるペア学習やグループ学習の有効性が示されている。一方、社会的事象の意味を考えたり、他者との関わり合いを通して自分の考えを深めたりするための指導の工夫には課題が見られた。

2 調査研究

都内公立小学校第5学年児童（65人）を対象に、質問紙及び面接による調査を行った。調査は、(1)「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力」の児童の実態、(2)「協働的な学び」の実施状況及び課題、(3)調査問題の内容で行った。

(1)の調査では、「課題解決」の学習過程に関する設問項目④(図1)について、「どちらかと言えは当てはまる」と回答した児童に面接を行った結果、「必ずしも『資料などを基に考えた。』とは言えない。」「なんとなく考えているが、その考えを他者に伝えたことはない。」等、資料を基に考えたり、考えを伝えたりする機会が少ないという課題が明らかになった(表1)。

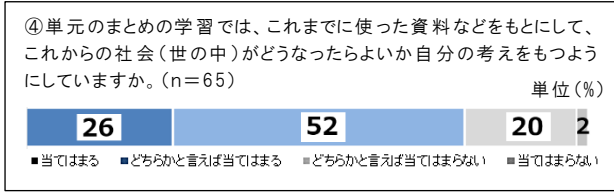


図1 資料の関連付け等について

児童の回答内容	・これからの社会について考える学習はしたことはあるが、 <u>必ずしも資料を基に考えたとは言えない。</u> ・今後の社会について、なんとなく考えてはいるが、 <u>考えたことを友達などに伝えたことはない。</u>
---------	--

表1 質問項目④についての面接結果

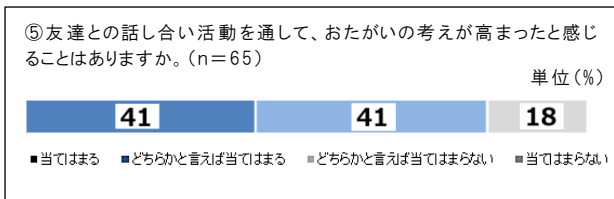


図2 「協働的な学び」の状況について

児童の回答内容	・友達がどのように学習を進めているかについては <u>あまり興味がない。</u> ・友達のノート等を参考にする <u>機会はない。</u> ・話し合いで意見や考えたことを出し合っているが、 <u>お互いの考えがよくなったという実感はあまりない。</u>
---------	--

表2 質問項目⑤についての面接結果

(2)の調査では、設問項目⑤(図2)について面接を行った結果、「友達の学習の仕方に関心がない。」「友達の学習の仕方参考にする機会が少ない。」「考えを述べ合ってはいるが、互いの考えがよりよくなったという実感はあまりない。」等の課題が明らかになった(表2)。

これらの結果から、「資料を基に考え、考えたことを伝え合う機会を確保すること」、「他者の『学習の仕方』に関心をもち、自分の学習に取り入れようとする意識を醸成すること」、「互いの考えの変容を可視化すること」の指導を工夫することが必要であると考えた。

(3)の調査問題では、「平成31年度 児童・生徒の学力向上を図るための調査 社会」を参考に作成した複数の資料を関連付けて考える問題を出題した。誤答であった児童は全体の約3割であり、面接を行うと、「資料と資料の関連付け方が分からなかった。」「それぞれの資料の見方が分からなかった。」等の課題が明らかになった。これらの課題を解決するために、検証授業において発問を工夫し、複数の資料を関連付けて考える視点を示していくことが必要だと考えた。

3 開発研究

調査研究の結果を踏まえ、検証授業において以下の手だてを講じていく。

(1) 「協働的な学び」を促す学習形態の工夫

第1時から第5時までの「課題追究」の学習過程では、自分の考えや理解の状況を踏まえ、児童が個人又は協働の学習形態を選択しながら学習を進める。第6時の「課題解決」の学習過程では、これからの工業生産の在り方についての個人の考えを持ち寄り、議論を行う。議論を通して異なる考え方が組み合わさることで、児童がよりよい考えを生み出せるようにする。

(2) 社会的事象を様々な立場と関連させ、多様な見方や考え方を促す資料提示の工夫

社会的事象を一つの立場だけではなく、様々な立場と関連させて捉えることにより、多角的な見方や考え方ができるようにする。検証授業では、複数の資料を関連付けて考える必然性を生じさせるために、工業生産が抱える課題について、行政や消費者等が行う課題の解決に向けた取組の資料を示し、多角的な視点で考察する。資料は学習者用端末に保存し、児童がいつでも閲覧できる環境にする。また、板書でも資料間の関連が可視化できるようにする。

(3) 「協働的な学び」を促すワークシートの構成

自分の学びの変容に気付かせるために、導入時とまとめて記入した内容を比較できる構成とした。記入したワークシートを学習者用端末に保存し、学級全体で共有することで、自分とは異なる他者の異なる様々な考え方に触れ、自分の考えを加除訂正したり、学習を振り返ったりして学びを調整することにつなげる。

(4) 資料を比較したり関連付けたりして考える発問の工夫

「課題把握」及び「課題追究」の学習過程では、共通点や差異点等に着目して資料を比較させる発問を行い、「問い」の生成につなげる。

「課題解決」の学習過程では、「原因と結果」、「手段と目的」等の資料同士の関連に着目し、既習の資料を関連付けて社会的事象の意味を考えるための発問を行う。

4 検証授業の概要及び考察

(1) 検証授業の概要

都内公立小学校第5学年児童(65人)を対象に検証授業を実施した。(小单元名「これからの工業生産とわたしたち」全6時間)第5時までは学習問題について追究し、第6時では既習の資料等を活用し、議論を通してこれからの工業生産の在り方について考える学習を行った。

(2) 「社会的事象の相互の関連や意味を考える」ことについて

第5時(「課題把握」～「課題追究」の学習過程)では、後継者不足などの工業生産の抱える課題の解決のために行われている取組について資料を活用して調べ、関係図にまとめる学習を行った。「生産者」、「行政」、「都民」がそれぞれ工業生産の抱える課題の解決のために行っている取組に関する資料を複数提示することで、児童は「工業生産の抱える課題を解決するためには、生産者だけでなく、行政や都民とも協力して取り組んでいく必要がある。」と考えることができた。さらに、ワークシート上の資料を線でつなぎ、関連付けて考えている様子や学習者用端末上に保存された既習の資料と本時の資料を見比べながら学習を進める様子が見られたことや振り返りの記述内容から、複数の資料を関連付け、社会的事象の相互の関連や意味を考える力が身に付いてきたことが分かった(表3)。

表3 児童の振り返りの記述

A児	タブレットで <u>前回の資料を見ながら、どの取組がどの課題の解決につながっているかを考えた。</u>
B児	〇〇さんのように <u>資料同士を線でつないでみると、一つの課題が様々な課題と関係していることが分かった。</u>
C児	「 <u>環境の保護</u> 」という課題に対して、 <u>関係がありそうな資料を線でつないだ。友達の考えを聞いて、他の資料も「環境の保護」に関係があることに気付いた。「環境の保護」のためには三つの取組が関係していることが分かった。</u>

(3) 「協働的な学び」を促す指導の工夫について

第6時(「課題解決」の学習過程)では、「中小工場の社長」又は「区長」のどちらかの立場を選択し、第1時から第5時までに活用した資料等を基に他者と議論することを通して、今後の工業生産の在り方を考える学習を行った。議論を通して、社会的事象を一つの視点で捉えていた児童が、複数の資料を関連付け、多角的に考えることができるように変容した(表4)。

表4 議論前後の児童の考えの変容

D児	議論前	ごみを少なくするために、使い捨てではない物をつくる。
	議論後	社会を発展させるために、使い捨ての物をつくらないようにし、なるべくリサイクルができる原材料などを取り入れてつくる。多くの高い技術を一か所に集中させて職人同士がアイデアを出し合い、現代の物とマッチさせて、便利な物をつくり、環境にも優しくなるようにする。
E児	議論前	消費者が安心して使える商品開発が必要。
	議論後	消費者が安心して使えることが大切。さらに、工業に関わる人たちで協力して、環境にも優しい工業生産をしていくことも必要だと思った。

(4) 検証授業後の質問紙調査

検証授業後に、質問紙及び面接による調査を再度実施した。(1)「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力」の調査では、特に質問項目④において「当てはまる」と回答した児童の割合が増加した(図4)。また、(2)「協働的な学び」についての調査では、特に質問項目⑤において、「当てはまる」と回答した児童の割合が増加した(図5)。面接では、「学習したことや資料を基に話し合い、これからの工業生産に必要なことを考えることができた。」「友達の考えを聞いて視野を広げられた。」等の回答があり、学習形態や資料提示の工夫等、一連の手だてが有効であったことが分かった。(3)調査問題では、1回目の調査で誤答であった18人の児童に改善又は改善傾向が見られた。正答につながった児童は5人であったが、その他13人の児童に面接を行うと、「資料同士の関係性を確かめた。」「授業と同じように、関係がある資料を線でつないだ。」等、資料の関連付けについての意識や手法に改善が見られた。

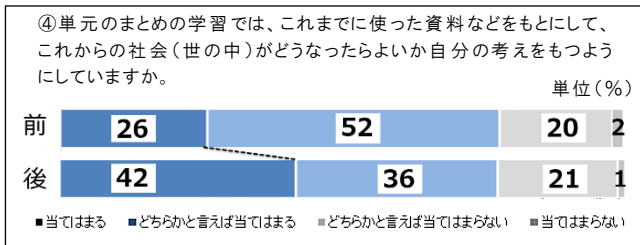


図4 (1)についての検証授業前後の変容

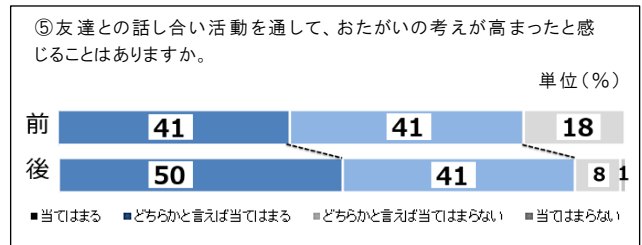


図5 (2)についての検証授業前後の変容

第4 研究の成果

社会的事象の相互の関連や意味を考えさせるために、発問や資料提示及びワークシートを工夫することは有効であった。また、ワークシートを共有したり、「課題解決」の学習過程で議論型の学習形態を取り入れたりする「協働的な学び」を促す指導は、自分の考えをよりよいものにし、学びを振り返ったりして自分の学びを調整したりするために有効であった。以上から、一連の手だてにより児童は他者と協働し、社会的事象の相互の関連や意味を考えることができたことが明らかになった。

第5 今後の課題

決められた時間で個人での追究を切り上げて議論の活動に移ったため、思考が途切れてしまった児童がいた。自分の考えをもつことができた児童から順次議論に参加させるなどして「個別最適な学び」との一体的な充実を図っていく。